

先生

先生からの二度目の手紙は私を少なからず当惑させるものであった。...

○○○○君、先日の開店祝いに贈った水墨画三点、如何だったろうか。銀座という
場柄、

大勢の人の眼に触れることと思つてがんばつて描いたつもりだ。君の選定で一向に構
わぬからお店の片隅にでも掲げてくれたなら望外の喜びである。学校を退職して十年
が経つ。かねてから興味を持つていた水墨画の勉強にのめり込んだ。どの道も奥義は
極めようとすると深いものだ。近頃は描くことに慎重にならざるを得ない、筆ひとつ
が画の構成を左右するからだ。しかし、この精進が一方で無聊な老後を支えているか
も知れない。同好の連中との月一度の寄り合ひは実に楽しみで、それぞれが作品を持
ち寄つてカンカンガクガクの講評会、終わると旨いものの食べ歩きがある。ホテルで
の洋食、和食、中華、最近は足を伸ばして県内一円にまで及んでいる。無論、すしも
つまむ。この山国では○○○○君のような旨いすしを食べるわけにはいかないだろう
が結構いける店もある。婦人の参加者が多い時は僕も青年のように気分が若返るから
不思議だ。ご存知のように家内に先立たれて七年、二人の娘達も東京と北海道に嫁い
でしまった。もう、この歳での再婚は考えられない。たとえ僕にその気があつても七
十過ぎの老人の処へ来てくれる物好きはいない。身の回りの世話を失くしたので日頃
の外出が億劫になつてきた。教え子達の同窓会や謝恩会に度々お招きを受ける。通知
を頂いているうちは華だと思つて、ワイシャツ、ネクタイ、ハンカチとむさくるしく
ないように気を付けている。だが、実際面倒でもある。加齢の所為だろうか。家内任
せの僕だったから、いなくなつてからは大変なのだ。娘が心配して時々電話をかけて
くれるが僕は、心配ご無用、と強がりと言う。本心は日常の些事をやつてくれる婦人
が欲しいのだ。

教え子は、先生お元気ですわね！先生お若いですよ！と万事が万事、お決まりの挨拶
で辟易している。元校長の肩書きは十年も前に棄てたのに世間では相も変わらず、校
長先生、校長先生と呼ばれて窮屈きんくつこの上ない。誰かいい人があつたら僕に紹介してく
れとは滅相もない、気軽に冗談も言えない。

老人は無欲恬淡、飄々として枯れているように思われがちであるが実際は大違い、
飯を食い運動や排泄もする、ならば当然、性もある。○○○○君、僕もこの歳になつ
ても婦人と相抱擁したい。女体に触れることが生きる源泉のような気がする。浄土真
宗の偉大な指導者の蓮如さんは八十四歳で二十七番目の子供をつくつたと言われてい
る。八十四歳で、だよ！僕にはそんな望みは無いが。それで、恥ずかしい話だが月一
度は隣県の温泉街のトルコ風呂へ足を向ける。大抵が薄闇に包まれる頃だ。女も部屋

も決めてある。相方はあれで四十前後になるだろうか、小作りな女だ。地味でおとなしそうな性格だ。自らの仕事に含羞を感じている気配がある。苦界へ身を投じている恥じらいが、ふとした所作に表われる。それがたまらなく好いのだ。子供を抱えての生活という。本当かどうかは別として、この歳では若い人に後れをとつてしまいうらい。適わないから足を洗おう、大阪へ帰りたいのだそうだ。それでも僕のために、いや、ひよつとすると金のせいかも知れん、倍近い金を与えているからだろうか、充分僕を満足させてくれる。冗談半分に、じゃあ、僕と結婚しないか、と言つてみた。そうですね、とハニカミながら、でも校長先生だったんでしよう。何処で耳に入れたのかここにも見事な教育者の亡霊が現れた。○○○○君、その時僕は泣きたくなつてしまった。無性に悲しかった。素性がバレたことより、誰かが僕のトルコ風呂呂通いを見つけたことよりも、それ以上に肩書き社会の惨めさを改めて知つたのだ。老醜と笑うなかれ！僕の日常な時間には女の風景がいつもある。もっちりした柔肌であり、黒い髪であり、燃えるような胸元なのだ。僕は耐え難くなつて酒を呑む、神経を麻痺させる。老人にも確実に性はある。

露骨な心境を綴つてしまつたが僕の人生もあと僅かな歳月に違いない。教職に就いていた人間が好色漢であるということも一つの事実だ。本来なら秘匿してしまふべきものだが君に高齢者の実態を知つてもらはう意味を込めて在りのままを述べた。

○○○○君、水墨画の講評もぜひ聞かせて欲しい。そういう批評を訊くことで僕の筆が変るかも知れないからだ。頼むぞ！僕は今、君が友人のような気分で仕方がない。じゃあ、さようなら。お元気で・・・

○○○○君、○○○○君、低く咆哮する先生の声が耳の中で木霊しているようだった。突然、昨夜の妻の放恣が私の眼のウラに浮かび上がった。読み終えた手紙が風もないのに私の手元から滑り落ちていく。

(夕風に耐えて) (百花繚乱) (深山薄雪草) の三枚の水墨画が桐の額縁と一緒に梱包されて半月前に配送されてきた。麻縄の結び目がいずれもきちつと括られてゐる。宛名の墨書きは雄渾な筆勢であつた。先生の面目躍如である。

先生は私の中学校時代の教頭で社会科の担任でもあつた。綽名が(ひょうたん)、先輩たちからの譲り受けのニックネームを我々は得意げに遣つた。

馬ズラに鼻眼鏡、口の上のちよび髭、やや腹の出た高い身体をのそのそ運びながら歩く姿は誠に言いえて妙であつた。中学校の社会の授業は週四時間、日本史、世界史、地理、一般社会がごちゃ混ぜであるからのがしぼりにくく退屈を味わう事がしばしばだった。一カ月も過ぎた頃だろうか、ひょうたんは社会科の授業中に限つて席替えをさせた。当時は、男子は男子、女子は女子と区別して座つていたからクラス中に戸惑

いがあった。その上、僅か一週間に四度の席替えに何の意味があるのかという疑問も一部の生徒に起こった。しかし、青春が始まりだした中学三年生の十五歳、本心はドキドキのときめきがあった。照れ臭さを動作で大仰に現す男子、俯き加減の女子たち。並んだ男女生徒が二人三脚で答えるようなテーマで授業をしたり宿題の相談をするような仕組みをひょうたんは作った。昼休みや放課後、図書館で否応なく調べなければならぬ問題を次々と我々に与えた。野球部や蹴球部、卓球部、さらにはコーラス部、などに在籍する生徒からは不満の声が上がったがそれも一時期のものだった。目当ての女子と隣同士になればうれしいがその反対もある。であるから、ひょうたんは一回こっきりのテーマで席替えを実施する。教室の空気が和やかになった。漠然とであるがひょうたんに親しみを覚えるようになる。話せる先公！という訳である。先生はよく短い感想文を書かせた。まるで国語の授業だな、と当時、オレは思ったものである。例えば、徳川幕府歴代の功罪を二人で調べて記述するとか、日本国憲法の前文と一条の書き写し、国連の加盟国の地図塗り、などの問題であった。

卒業を控えた三学期の或る日、ひょうたんは、今日は愉快で楽しい事をやりましよう和我々に提案した。隣同士へ宛ててめいめいが(ラブレター)を書こうというのである。間もなく、皆さんは卒業するのであるから、お互い隣の人を彼氏、彼女と思つて書いて下さい、いずれ君たちが社会に出ればこういうことに遭遇するので決して可笑しいことではありません、ひょうたんは言う。えーっ！、やだ！途端に悲鳴を上げる女子、げらげら笑い出す男子たち、教室中が騒然とする中でひょうたんは教壇で両手を叩きながら真剣な表情で呼び掛けた。短くても長くてもよろしい、気持ちを含めて書いて下さい。すると、こんなこと、しなきゃあいけないんですか、と一人の女子生徒が口を尖らせて立ち上がった。学年でも評判の弁論部長だった。気取り屋、と我々から陰口を効かれているおませな子である。ひょうたんは黙っている。十分ぐらいが経過した頃から、教室が静かになった。時折、くつくくつ、ハッハッハッの忍び笑いが起きる。ラブレター書きに真面目に取り組む生徒もいれば、机に頬杖を付いて無視する生徒もいる。照れ臭くて仕方ないのがみんなの本音であろう。私も何とか書いたのである。

(オレは今、図書館にいてテストが近いというのに本を読んでいます。勉強はツマライナイ。手にしている本は、クラスが違うが友人のY君が薦めてくれたものだ。国語で教わった川端康成の代表作(伊豆の踊り子)、オレが主人公で横の君が踊り子、そんな気分で読み終えました。歌謡曲の(踊り子)は三浦光一が歌っています。サヨナラもいえず泣いていた、の歌詞がたまらなく好いです。オレと一緒に歌ってください)

私は今でもその短い公認ラブレターを誦そとんじることが出来る。

ひょうたんの提案に賛成して書き綴られたラブレターはクラスの半数を超えた。私

隣の女生徒も腕を抱えるようにして原稿用紙に向かっていた。ソフトボール部の選手で色が浅黒い、普段はおとなしいが試合の時は見違えるような活発な子である。我々はタドンという綽名を付けて応援したことがあった。次の社会科の時間には手紙の成果の発表があった。誰のものともつかぬラブレターをひょうたんはスラスラと読み上げていく。一枚二枚三枚、ひやつ、ひやつと奇妙な声をあげる男子や、ふふふふつと口に手をあてがう女子、クラス中がガヤガヤと盛り上がる。その内、うっかり実名を書いてしまつて書き手本人が分かる生徒もいた。私の隣もその口だった。

【わたしは副委員の〇〇〇〇さんの柔道の試合の応援に行きます。母校のためにがんばってください。高校へ入ったら交際してください。】

隣の生徒が一瞬真つ赤になつたような気がした。浅黒い顔がさらに黒くなつたようだった。その顔を両手で覆つていた。

あとで分かつたことだつたがひょうたんは卒業間際のどのクラスでもラブレター授業をやつたらしい。生徒達の間でたちまち噂が広がつた。それが最後のPTAで問題になつたと、滅多に学校へは出掛けない母から私は直接聞いた。

教頭先生ともあろう教育者のトップが、中学生に恋文教育するとはもつてのほか！という非難が多数を占めたというのである。

私はそれを母から聞いた時、全身の血が逆流するほどの憤りにつつまれた。PTAへ乗り込んで居並ぶ大人たちの欺瞞を暴いてやりたい、そう強く感じた。しかし、結局それはマボロシに終わったが、すぐに先生の元へ駆けつけたかつた。先生に、ありがとう、を精一杯言いたかつた。

我々の卒業と時を同じくしてひょうたんは別の中学校へ校長として栄転する。担任教師でないために以後、私達はクラス会でも呼ぶことはなかつた。だが、私には個人の秘密があつた。希望校進学のために父がひょうたんに裏口入学をお願いしたらしい。それで先生には後ろめたい記憶が残つていたので。

ひょうたん先生への複雑な感情、惜別といささかの悲しみの混在した気持は、高校入学の華やかな高揚した気分の中で霧のように霞んでしまつた。不正の狡さも忘れていた。

だが、公認ラブレターは私の中に何も残さなかつたわけではない、甘酸っぱい戯れの残像が永い年月、心の奥深くへ仕舞われている。

* * *

彼此三十年も昔の話を思い出したので。机の脇に落ちた手紙を掬うようにしてから、改めて部屋の隅に立て掛けてある水墨画に目をやる。濃淡の中に蕾状の白い花が咲いている。哀しみを帯びた筆遣いが全体を包んでいる。

古い時間のなつかしさに熱く込み上げるものがあった。・・・